
ネヴァー・マインド～毎日をただぼう然と生きる馬鹿どもへ～

SID

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネヴァー・マインド〜毎日をただぼう然と生きる馬鹿どもへ〜

【Nコード】

N5237F

【作者名】

SID

【あらすじ】

原宿三大バンドの一角、『THEFREED』が二分した。『THEFREED』の二人の天才、隼人と戒は、それぞれの理想とするバンドを作るため、それぞれメンバーを集めはじめる。バンドに青春をそそいだ若者たちのお話。

ナンバー00：プロローグ

ただボーゼンと毎日を送るバカ野郎どもへ…

数字であらわせない人生の一瞬で

すこしでも、一人でも、同じ気持ちになれたのなら

この作品に意味はあるのさ!!!

渋谷を拠点に活動している『THE FREE』（ザ・フリー）は
四人編成の典型的なロック・バンドである。

彼らは四人とも実力、才能を備えた集団だったが、このライブハウ
スに近い居酒屋で今まさに『THE FREE』は解散を強いら
れていた。

『THE FREE』のリーダーでギタリストの旭^{あさひ} 戒^{かい}はメジャー
デビューを目的とするより大衆的なロックバンドを目指し、楽曲を
作ってきた。しかしドラムの中川^{なかがわ} 隼人^{はやと}はいままで誰もやったこと
がないタイプのバンドをやリたかったのだ。

『THE FREE』の中でもずば抜けて才能があつた2人は、こ
れで対立し、バンド自体が解散するハメになった。

「メジャー・デビューのためにはサウンドをもっとキャッチーにす
るんだ。歌詞は誰もが共感できる恋愛系でいく。」

戒は、自分の考えるいわゆる＜大衆向け＞バンドの構想を繰り返して話続けた。

「その話はなんとも聞いたけどよ、全然魅力的じゃねーんだわ」
戒の話を油をさす隼人の挑発的な言葉。これがいつもの定番の過程だった。

「だから解散するんだろ、それはいいけどよお、もう解散が決まっているのになんで俺ら2人を呼んだんだ？」

「…」

ギターの原田 功はめんどくさいのが嫌いな男だった。ベースの峰沢 アキトは口数の少ない男だったので、いつも功が2人の天才を制していた。

「ああ、俺らが功とアキトを呼んだのは『THE FREE』解散に当たって、二人はどうするのかと思っただけな。」

戒だ。戒はさらに話を続けた。

「考えてみれば『THE FREE』が解散する理由は俺と、このわからずやが意見が合わなかったことが原因。2人がイヤじゃなかったら、俺についてきてくれないか？」

戒は一瞬隼人をにらみつけたが、隼人は鼻をほじりながら「ふっ」と言っただけだった。

「…俺は戒について行ってやるよ、この先なにもすることないしな。」

腹だのその言葉に隼人はすこし右の眉をピクリとさせた。

「アキトはどうする？」

3人の目線が寡黙な一人の男に注がれる。

「くだらないね。」

アキトはポツリと一言。

「俺はとりあえずどちらにも入らない。また新しいバンドを探すよ。」

隼人がふうっと息をついた。

「そうか、お前ほどのベースは他にいないんだけだな。」

そういうと戒は「功いくぞ」と言っサツと立ち上がった。

「隼人、俺はここいらで最強のバンドをつくるよ。」

戒はそういつてじつと隼人をみつめた

「最強のバンドねえ……」

隼人はジーンズの右ポケットからタバコを取り出し火をつけた。

「じゃあ俺は最高のバンドを作るよ。」

この言葉を交わした2人の天才は、自分達の考える理想のバンドを組むことになる。

大衆向け。メジャー思考の旭 戒が考える 最強のバンド

今まで誰もやったことのない中川 隼人の 最高のバンド

どちらが正しいのか、どちらが間違っているのか。

それは本作が終わってもわからないかもしれない。

しかし、この作品が読み終わった後だ。

少しでも、少しでも、心に何か残るのだったら。

俺はこの作品に満点をつけたい！！！！

何度も言う！

ただボーゼンと毎日を送るバカ野郎どもへ！！

数字であらわせない人生の一瞬で

すこしでも、一人でも、同じ気持ちになれたのなら

この作品に意味はあるのさ！！！！

ナンバー00：プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

昔に書いていた作品を投稿していきたいと思えます！

ナンバー01：バカとエロ本とストラトキヤスター

毎日をただばう然と生きる馬鹿どもへ！

と思いつきり言っではいるものの、これを読む人たちがばう然と毎日を過ごす馬鹿者でない場合。

たとえば受験勉強の合間によんでいるもの。毎日部活や仕事を頑張っ
て、生きがいを見出しているもの。ただボーゼンと毎日をすごす
天才。毎日真剣勝負で疲労困憊している馬鹿者etc…

そんな人にとつて　ただボーゼンと毎日をすごすバカ野郎　という
人間のビジョンがイマイチ掴めないと思う。

そこで、その典型的な存在である男を一人紹介しよう。

「ああ、めんどくせえ。」

どうだろう？この第一声。まだ作者が彼がどんな人物かも説明して
いないのにも関わらず、青春小説（なのかな？）の主人公の登場
の第一声としては9点ぐらいである。赤点である。でもまさに　た
だボーゼンと毎日をすごすバカ野郎　の典型なのでめでたく主人公
に選ばれたのだ。おめでとう。

さて、まだ名前も読者に伝えていない主人公である彼は何をめんど
くさがっているのだろうか？彼はさっそく人生、いや、この　ネヴ
アー・マインド　に出演することをめんどくさがっているのか！？
「バイトなんか行きたくねえよ…」

バイトか…

彼の名前は前原　タクト（まえはら　たくと）。高校三年である。

1月であるにもかかわらず推薦入試で大学を決めた彼は、毎日を学

校、バイト、自慰行為に捧げるところにでもいる男だ。ビジュアルは悪くない。私服はまあまあオシャレ。顔は整っているし、髪は今流りの髪型をしている。身長は170程度でまあそれなり。

基本的に、主人公というのはずば抜けてカッコいいか、ずば抜けてダサいかのどちらでもあるが、本作の主人公、タクトはどちらでもない中立位置。なんともこの作品にふさわしい。好きな音楽は邦楽オリコンで上位を取るもの、服も髪型もドラマも映画も今人気のもの。友達関係普通。彼女なし。めんどくさいもの嫌い。プチナルシスト。

さて、

紹介終わり。どうだろう。まるで人生の7割をすでに終えているかのごとく、彼は世界に飽きている。

タクトくんの特徴はわかったかな？……………

うん！よし！理解したと作者は考えます！話を続けますね。

タクトは某ファミレス　ゲニーズ　で働いている。自給800円。都内の割には安い。

日曜。遅くまで寝ていたタクト愛車のマウンテンバイクにまたがり、10分かけてバイト場に向かっていった。

タクトの家は住宅街だった。たくさんの家の間をスルスルと慣れた走行で通りぬけ、住宅街を抜けた先の坂をサーと降りる（タクトはこの坂を降りるのが好きだった）。坂を降りきったところを右折し、そのまま商店の立ち並ぶ路地に入っていく。その商店街は、若者達が集う小さな原宿みたいになっていた。楽器屋や、CDショップ、タクトが友達と集うゲームセンターがシュッシュッと視界を通り過ぎていた。商店街の出口でブルーシートを広げ、女の人で裸で映っている雑誌をたくさん広げて売っている男を横目に見ながら商

店街を抜け、大通りに出る。

「最近工口本買ってねえな」

こんなことを平気でつぶやくような男だ。この作品の主人公は。

ガソリンスタンドの横に、オレンジ色の ゲニーズ とポップな看板の建物があった。シャーツとマウンテンバイクを自転車置き場にとめ、裏口から中に入っていた。

「あ、今日は遅刻しなかったんだあ」

裏口はキッチンと繋がっていた。キッチンに入ると、すでに着替えをすまし手を洗っていた上沢 ^{うえさわ} 理恵 ^{りえ} が話しかけてきた。彼女とは学校が同じで隣のクラスであり、幼馴染でもあった。

「まあねえ。俺だって毎日遅刻しねえよ」

食材置き場の棚の上の着替えにササツと着替え、理恵のとなりで手を洗った。仕込みのため大学生のバイトが何人か早く来ていた。

「ねえ、今度さ『RINCH』っていうバンドが近くのハウスでライブやるんだあ。行かない？」

理恵はパンクだの、ロックだのってバンドが大好きだった。タクトは「俺そいうのわかんねえって。バンドっていったらウーバーとかミスチルとかしか聞かねえんだよ。」

『ウー・ー・ワールド』と『ミスター・。ルドレン』。とりあえず誰もが知っているバンドである。

「ええーかつこいいよ！聴きなあ、ロック。」

理恵はのろいしゃべり方なので、いつもそれをタクトにからかわれていた。

「いいつつうの。興味ねーし。」

なんとまあ、ハングリーさが無い。主人公には「海。王になってやる！」とか「ぜってえ。影になるってばよ！」ぐらいのハングリー精神が必要ではないのか！？

「今度貸してあげるよ！『GREENDAY』とか『SEX PISTOLS』とか！」

理恵の口から怪しげな言葉が出る。

「なんだって？」

「え？『SEX PISTOLS』？」

「もっかい言って？」

「『SEX PISTOLS』？」

「いや、ピストルズなしで。」

「バカッ」

濡れた手でタクトの肩を叩いたので肩に理恵の手形がついた。いつも2人はこういったどうしようもない会話を続ける仲だった。

「で、行ってくれないの？」

理恵がまた話を戻してきた。

「行かんて」

プチ関西弁。

「はあいみんな集合！！」

きたよ・・・という感じでキッチンにいた全員が、待機室から出てきた小太りで、帽子で若ハゲを隠した中年男に視線を送った。店長である。

「今日ね、実はみんなに新しいバイト君を紹介するじょう！」

スベツてる…スベツているぞ。店長。

「隼人くん！」

そういうと、待機室から一人の男が出てきた。

「すげえ…」

それが隼人と言われる男を見たときのタクトの第一声である。（初登場したときの第一声と比べれば100倍マシだな）

出てきた男は調理帽と、エプロンというキッチンスタイルだったが、帽子の隙間から赤い髪が見えている。右耳に4つ、左耳に5つピアスがついているのがみえた。耳だけではない、鼻にもピアスの穴が開いている。眉毛はキリリと整えていて、目はたれ目だが一言で言うところ……かっこいい…

「あー！」

結局、話は『JESSIX HUNTER PRIDE（ジェシックスハンタープライド）』（以下JHP）の話がほとんどだった。JHPは世界で1000万枚を売り上げるモンスター・バンドで、バンドをやっているものにとっては、神と呼んでいい存在だった。俺はやっぱりJHPの『Now War Or』が一番好きなアルバムだよ。」

隼人はふつと言った。

「でも私は『Out Side』の衝撃はすごかったけどなあ」
理恵もはつと答えた。

「なあ、俺はミスチルの『しるし』が好きだよ！」
話に入ってくるな、タクト。

「『Out Side』かあ。確かにあのアルバムはすごいよ、今までのJHPにはないスタイルのサウンドをたくさん取り入れたしね。」

隼人はすつと言った。

「私は『FLY!』からしか聴いてないんで、もっといろんなアルバム聴きたいなあ」

理恵はシュツと答えた。

「だーりん だーりん♪」

だまれ、主人公のクセして!!!! いや、主人公はもっと話さなきゃダメか・・・

「『FLY!』からかあ。1stから聴きなって！今度貸してやるよ。」

隼人は目を見開いて言った

「え！本当！？インディーズのやつ？」

理恵は嬉しそうに答えた。

「いろおーんなかーおー♪」

そうだ！もつと歌え！主人公だろ！！ハブかれていいのか！！！
「ちよつと！うるさいよ！」

理恵が言った。主人公タクト敗北。

「そうだ理恵ちゃん、俺バンドメンバー探してんだけど、いない？
タクトくんだけ？君も誰か知らないかなあ」

隼人がころつと話を変えたが、誰も気にしなかった。

「タクトさ、ほら、中学のとき文化祭でバンド組んでたじゃん。やつてみたら？」

「え？俺？」

タクトがちよつと照れた顔をした。

「悪いけど、俺は真面目にバンド活動をする奴だけが欲しいんだ。」
あまりに冷たい言い方だった。まあ、こんな主人公を冷たくするのは当たり前か。作者は隼人に賛成！

「おい、俺のどこがふざけてるって言いたいんだ？」

タクトは下を向いている隼人をにらみつけた。やめとけって。

「隼人君は、そういう意味で言っただんじやないよ。」

理恵がタクトを制そうと、立ち上がろうとしたとき

「じゃあ、聴かせてみるよ、お前のギター。」

隼人がタクトの目を見ながら言った。清んだ目だった

「…ああ、いいぜ」

タクトは内心ビビっていた。本当に最後にギターを弾いたのは中学生のとき以来だったのもそうだが、隼人のなんともいえない存在感に押しつぶされそうだった。

タクトの部屋は座敷だった。いわゆるオシイレというところを開き中から誇りまみれのギター入りケースを取り出した。

「ごほっ！ごほっ！」

隼人はギターを取り出すときにエロ本が二冊落ちたのを気付いたが、何にも言わなかった。

「何が弾けるんだ？」

隼人はあぐらをかき、腕を組んでタクトを見つめ、まゆをピクリとさせた。

「『17。R』の『空に唄えば』だ！」

かつこよく言ったものの、なんせタクトが小学生のときに流行った曲だ。古い。ギターケースから当時8500円で買った白いストラトキヤスター（ギターの名前）が出てきた。ピックをつまみ、ベツドの上にどかつと座り、タクトは弾きはじめた。

「いくぞ！」

ジャッジャッジャッと音を鳴らしたのはいいものの、なにか違う。

「あ、あれ？」

タクトはつづけた。

ジャッジャッジャッジャッジャッ、ジャジャッジャージャーザーン

理恵はまさに頭の上に『？』マークを浮かせて見ていた。

2分間ぐらい、上手いとはいえないギターを2人に披露した本作の主人公タクトは自身満々でこういった。

「まあ、こんなとこかな？」

タクトは、4年間弾いてなかったにしては上手くできたなあと思っていたに。だがそれに対する隼人の言葉は

「……まずチューニングがずれてる」

隼人は無理矢理タクトのギターを奪い取った。ブ~~~~~~~~ンと6弦（一番上の太い弦）を鳴らし、チューニングをはじめた。3分間、ポ~~~~とみているだけのなんとも情けない本作の主人公。

「『Time Of Your Life』。」

ポツリとつぶやくと、隼人はギターを弾きはじめた……

ジャンジャンジャンジャン、ジャジャッジャンジャン。

「あ、『GREEN DAY』」

理恵のそんな言葉が聞こえないほど、その曲にタクトは聴き入っていた。

なんとも幻想的な気分だった。アンプに繋いでいないエレキギターがこんな音をだせるのか……と思わせるほどの曲だった。

「俺の専門はドラムだが」

いきなりギターを弾くのをやめ、タクトに返したので、理恵は少し残念そうな顔した。

「そんなに俺のバンドに入れると思うな。」

冷たく言い放つと、隼人はタクトの部屋から出て行こうとした。

「まってくれ!!」

タクトの声が久しぶりに大きくなった。いいぞ!なんか主人公っぽい!

「いまのなしにしてくれ!!!」

主人公っぽいって言ったのもなしにしてくれ。なさけねえ・・・

「練習すればもっと上手くなる!だから!」

「だから待てて?」

隼人が振り向いた。

「俺は最高のバンドを作るんだ。わかってるのか?それに入れてくれだど?」

隼人はあえて突き放す言い方をした。隼人はタクトが引くに引けない状況になっているのを察知し、こいつはダメだ。と判断したのだ。「女の前で恥じをかきたくないから、そんなに強く怒るなよ」と顔に出ていた

「なんでもする!な?」

かっこわるい!もうなんとも情けない。主人公変えるか?

「わかった。じゃあさっき俺が弾いた曲、一週間で弾けるようにしてこい。じゃあな。」

おお!太っ腹!

バタン!

隼人はそそくさと出て行ってしまった。

沈黙……

「どうすんのよお。」

理恵がパツとタクトを見た。

「練習するよ！おい！あいつが弾いた曲ってなんて曲だ！？」

「『GREEN DAY』の『Time Of Your Life』よ。」

「じゃあ！！！」

こうして単純でバカでアホでいい加減で情けない本作の主人公の闘志はメラメラと燃え上がるのだった。

大丈夫かな…

ナンバー01：バカとエロ本とストラトキャスター（後書き）

隼人とタクトの出会い。文才がないな・・・おれ

ナンバー02：バカ野郎、始動

GREEN DAYのビリー・ジョー・アームストロングという男は、本当にバカな男で、インタビューには真面目に答えない、イベントの最中に他のアーティストにキスをする等、ふざけるのが大好きな子供みたいな男だった。

だがしかし、彼にギターを弾かせれば何千万の人々がその音色に惚れ、ロックを歌わせれば何千万の人々に感動を与え、ライブをやれば何千万の人々を発狂させた。

単純な3コード進行のサウンド、下品に社会を風刺する歌詞。多くの若者がそんな彼らの心から歌う音楽に熱狂した。そして共感したんだ。

何を隠そう作者も、世界で一番好きなバンドがGREEN DAYなんだよ。

本当に奴らは熱い。爆発的人気のせいで、アイドルバンドなんて周りに風刺され、ミハーパンクとバカにされても、作者は彼らの音楽が死ぬほど好きなんだ。

「わかんねえ!!!」

前回、いい加減な約束をした本作の主人公タクト。

「もう一回やり直そうよ。最初に比べればかなり上手くなったと思うよ?」

なぐさめる理恵。それが無性に心に響いて痛い。

「なんなんだよ、このG、C、Dって…」

「アンター応ギターやってたんでしょ…?」

ビリーとの類似点は本当にバカと言うところだけだな。ビリーには

それを正当化するだけの実力があつたが、もちろんタクトにはない。
「やーめたっ」

タクトはギターをベッドに放り投げて、お手上げのポーズをとった。
「ええ、もうやめちゃうの？」

応援していた理恵もあきれ始め、頭の中でお手上げのポーズをとった。

「そうだ、今日『JHP』のアルバムもってきたんだ。」

理恵は「くまのぷくさ。」のたくさんついたリユックから、一枚のCDを取り出した。CDのジャケットには、アニメチックなイラストで墓場の中心でほえている狼が描かれていた。

「『JHP』？なんだよそれ？」

タクトは畳にゴロンと寝転んでお手上げポーズのまま理恵を見た。
ちなみに「JHP」の説明は前回したので、頭のいい読者のみんなは覚えてるよねえ？

「『JESIX HUNTER PRIDE』の略。今世界でもっとも人気のあるバンドだよ。インディーズデビューして、たった2ヶ月で実力を認められて、メジャーデビューしたの。5年たった今でに信じられないスピードで世界のトップにたって活躍している口ツク・バンドだよ。」

おお…いつからそんな説明つたらしくなったんだ？本作 ネヴァー・マインド ヒロインの理恵よ…

まあ、作者としては楽なだけだ。

「んで、これは私が始めて買った『JHP』のCD、試しに聴いてよ」

理恵はCDを畳に置き、スツと立ち上がった

「え？もう帰るのかよ。」

「まあね。私はアンタと違って、『大学受かったからもう何もしない』なんて言ってるおバカちゃんじゃないもん」

そういつてリユックをとろうとしたとき、ミニスカートからマシユマロのような太ももと、下半身の下着が不意にタクトの視界に入っ

てきた。

「白か。」

顔面にクッションがバフツとぶつかった。

「バカ。」

顔からクッションが離れるときにはもうすでに理恵はタクトの部屋から消えていた。

タクトの家から5km離れた原宿の中心。

ガヤガヤと若者達がまるで蟻の行列のように一定の速さで街を歩いている。本作の主人公よりも主人公らしい元『THE FREE』のドラマー中川 隼人は、そんな人々が好きだった。ずらずらと流れに逆らわず目的もなく歩き続ける若者たちが、自分の意思をもたず人生になんの楽しみもないクズ共に思えて、バンドという生きがいですでに発見している彼は無意識に優越感に浸っていたのだ。

「1050円になります。」

隼人は、裏原宿にあるライブハウスの前で金を払った。今日出演するバンド名を確認するため、入り口のすぐ横のコルクボードの手書きタイムテーブルに目をやった。

1・TIME OR TIME

2・SECOND JAM

3・カラポン

4・KING 007

5・F・N・H

6・ハンターマン

7・18MAN

「クソバンドばっか…」

はあっとため息をついて音が漏れないように作られた重い扉をあけ

た。中に入るとアンプからギターとベースのサウンドが勢いよく耳に飛び込んできた。ドラムの連打音は遅れてやってきたが、それが意図的なものだと言人にはすぐに理解できた。

今隼人の目の前でパフォーマンズをしているハンターマンは、原宿を拠点に活動するオルタナティブ・ロックバンドだ。隼人も『THE FREE』時代に何度か対バンしたことがあった。

演奏力はそこそこだが、表現力が無いバンド

隼人は自分の中でハンターマンにこんな位置付けをしていた。

最近ハンターマンのベースは就職の問題でバンドから脱退したので、ヘルプとして元『THE FREE』の峰沢 アキトがプレイをしていた。

ハンターマンは最後の曲を終え、控え室に戻っていった。また重いドアを開けて外に出た隼人は、「ふう」とため息をついてチケット売り場のとなりにある控え室の扉をあけた。

「隼人！」

扉を開めたと言人、何人もの男がしきりに隼人の名を呼んだ。

「よお。」

隼人はみんなに聞こえるように大きな声で言った（つもりだった）。

「隼人、俺たちのライブ見に来てくれたのか!？」

と、SECOND JAMのボーカリストが隼人の肩をパンツと叩いた。

「まあな、相変わらず上手いじゃねえか。」

もちろん隼人はハンターマンしか見てないので、SECOND

JAMのライブなど見ていない。

それぞれのバンドが次々と話しかけてくるので、隼人はすこしづつイライラしていた。我慢できずに隼人は「アキトはいるか?」と切り出した。

「アキト? いるぜ! なんだ? 『THE FREE』でも再結成するのか?」

仲良くも無いF・N・Hのベ이스トが笑いながらなれなく言
つてきて、内心かなりイライラしていたが

「まあなあ、へへへ」

と、作り笑い&社交辞令でなんとかのりきった。

アキトは、控え室から出たすぐにあるトイレの前のベンチでタバコ
を吸っていた。隼人は控え室の扉をしめ、アキトの隣にドカッと座
った。

「まったく、お前も実力のねえクソバンドなんかのヘルプにつくの
やめろよ。」

隼人はおもいきりため息をつき、前かがみになり下を向いた。

「俺は金さえ払えば小学生バンドにでもヘルプで入るよ。」

ふううつとタバコの煙を吐いた。

「俺はこれから新しいバンドを立ち上げる。この前話した最高のバ
ンドだ。」

隼人はアキトの目を見なかった。そしてアキトは隼人の言いたいこ
とをとっさに理解した。

「俺もその『最高のバンド』に入れって？」

アキトはタバコを口にくわえ、また煙を口にふくんだ

「話がはやいねえ、そのとうりだ。」

隼人がニコツとしてアキトを見た。アキトはあえて目を合わせない
ようにした。

「実は昨日、戒も俺のところに来たよ。」

「なんだと!？」

まったく予想外だったが、考えても見れば、東京でもかなりの実力
者であるアキトを野放しにしとく手はない

「戒はすでに元『PM:SO』（ピーエム・エスオー）のドラムを
バンドに迎え入れて、『SONIC ADDRESS』（ソニック
アドレス）っていうバンドを組んだ。戒のかかげた『最強のバンド』
は始動しはじめたぞ?」

アキトの口調は落ち着いていた。『P M : S O』は、都内でも3本の指にはいるほどのパンクバンドだったが、先月突然解散していた。

「ドラムの実力だったら俺の方が上だ。」

隼人はムツとした表情で答えた。

「俺もそう思うよ、だから『SONIC ADDRESS』の勧誘を断った。」

「じゃあ、俺のところに!？」

隼人が笑顔になると同時に

「ただし、条件がある。」

アキトは簡易灰皿でタバコの火を消した。

「な、なんだよ・・・」

隼人が「厳しい条件はやめろよ!？」という顔で見えてきたので、優しい口調で言った。

「戒より実力のあるギタリストを連れてくることだ。」

さてさて、またまた5km離れたタクトの家では、タクトがエロ本と戦っていた。

「やっぱり蒼。そらは最高だなあ・・・」

大きくやわらかそうなおっぱいがページいっぱいに広がり、タクトの下半身の中心部にあるライトセイバーがぶいーんと臨戦態勢になった。まったく主人公らしくない。かなしいぞ。

1時間、いやもつとたつただろうか。タクトが頭のなかで蒼。そらをさんざん犯しおわった後、タクトはふとギターを見た。やっとやる気になったか!？

「できるわけねえよな。」

自分で言うな。

「暇だ。」

ギター弾けよ。タクトは畳においてある『J H P』のCDに手を伸ばした。

「ジェシックス…フンテア？プリデ…」

『JESIX HUNTER PRIDE』（ジェシックス・ハンター・プライド）を本当に読み間違えたんだとしたら本当のバカである。

「ジェシックス・ハンター・プライドね。」

タクトは、なに考えずCDコンポに『JHP』のCDをセットした。

「これで全然良くなかったらなんて言おう…」

本当にこの男はなんてことを言い出すんだろうか。

CDの再生ボタンを押し、本棚から何冊かのファッション詩を取り出してベッドで読み始めた。

するとコンポから、「ザー」という砂嵐が聴こえた。

「は？」

タクトは故障かと思い、消そうと立ち上がった。すると砂嵐はプツンと切れた。

…

…

…

…

：

人間は、出会ったことの無い衝撃を受けると腰を抜かす。

いままさに主人公であるタクトにその現象がおこっていた。CDコンポの再生ボタンを押してから45分たっていた。

「す、すげえ……」

ギターサウンドはタクトの鼓膜をわしづかみし、ベースは心に何かを訴えかけるうなり声のように聴こえた。ドラムはまるで、タクトの中の「感動」という感情を直接叩いているかのように聴覚を刺激した。

そして、まるで神が歌っているような清んだ声。歌詞はわからなかったが、その曲がどういう状況で、どんなことを伝えたいのかハッキリ理解することが出来た。

最初の砂嵐がイントロだということを理解するのに用いた時間は45分。

タクトはもう一度コンポの再生ボタンを押した。

・
・
・

・
・
・

⋮

ザ
――
――
――

・
・
・

まるでCDを聴いていた45分間が夢のように思えた。再生ボタンを押して、砂嵐が消えた瞬間から、45分後の世界にタイムスリッ
プしたかのように思えた。

「ジェシックス…ハンター…プライド…」

タクトはバツと起き上がり、目の前のギターを腕の中に引き寄せた。

自分も、こんな風に…

なんのとりえも無く

なにもしたいと思わなかった一人の男が

やっと動き出した瞬間だった。

ナンバー02：バカ野郎、始動（後書き）

タクトがJHPと出会いました。

ちなみにJHPはこの小説のオリジナルバンドです。

ナンバー03：天才の意義 in the タクトの部屋

理恵の置いていった『JHP』の3rdアルバム『FLY!』は1
2曲入りのフルアルバムだった。

JESIX HUNTER PRADÉ
「FLY!」

- 01・Music On Sand Storm (intro)
- 02・FLY!!!!
- 03・Ahead
- 04・Rental Girl Friend
- 05・Wanderer Song
- 06・Picture
- 07・Foolish Person
- 08・Human Experimentation
- 09・In Time
- 10・Starts There.
- 11・Now.
- 12・The End Of The World

「このアルバムのすばらしい所は、JHPなりの人生論を語っているところだな。俺は奴らのデビューからいままでを見てきたが、奴らは常に新しいことに挑戦し続けてきたんだ。え？なぜかって？そ

れは奴らが『JESSIE HUNTER PRIDE』だからさ！俺はこれからも奴らの成長の過程を見続けていきたいよ。え？なぜかって？それは俺が『JHP』ファンだからさ！」

タクトは、CDについてきたアルバムレビューを復唱した。

「いいな、うん。」

タクトはこの一週間、数えきれないほどの『JHP』の『FLY！』を聴きまくった。それこそ曲のフレーズから、適当な英語詩でなら全曲歌えるまで（歌えるとはいえない）。もちろん曲のタイトル、順番、イントロクイズをすれば、一番最初に

「それは3rdアルバム『FLY！』に収録されている4曲目の『Rental Girl Friend』です！」

と回答できる自信もついていた。くだらない自信である。

『FLY！』を死ぬほど聴くのと並行して、ギターの練習も死ぬほどしてきた。それこそ狂ったように…母親いわく

「あれはまるで何か悪霊にとりつかれているようだったわ！」

と、後の作者インタビューで語っている。なにはともあれ、ギターの練習は十分に行ったし、もうやることは無い。今日は『FLY！』を聴いて前祝いをしようではないか。

夜10時。理恵がタクトの部屋で言った。

「そろそろCDかえしてよ」

タクトの顔はまるで新聞紙のようにクシャツとなった。私のライティング能力では表現できないほどのグロテスクぶりである。こっちは向くな

「え！？まじかよ！わ、わかった、今MDに録音するから待ってくれ！っていうかMDねえ！！」

「へえ、結局ハマったんじゃない。そんなに良かったんならCD買えば？」

理恵のいつもの適当な発言。かわいい顔をしているが、何も考えずに発言するのでたまに恐ろしい。

「そうだな！よし！買いに行こう！」

そしてその適当な発言をスポンジのように脳に吸収するバカ。

「今からじゃどこもやってないよ、ていうか明日だよ？隼人くんと約束の日。大丈夫なの？」

理恵は立てかけてあるギターを見ながら言った。理恵の心配はごもつともである。作者でさえこいつが練習してる所を見てない…いや、読んでない…いや、書いてない。

「大丈夫大丈夫、もんだいねえよ。」

タクトの言葉はいつもいいがげんに聞こえたが、この言葉だけは理恵の心を打っていた。

次の日 AM 11:46

「はあゝあ」

原宿の楽器屋『D・D・D』（デイレクシオン デイクスター ダイヤモンド）で、赤い髪の毛をなびかせながら、第二の主人公である隼人は電子ドラムを叩いていた。ちなみにこの店の名前の意味は、店長の好きな言葉三つを繋ぎ合わせた造語。

「どうした？隼人、やつぱ『THE FREE』の解散はきつかったか？」

『D・D・D』の店長のおつちゃんは、元インディーズバンドのギタリストで、『THE CLUSH』を愛する現在42歳の男だ。ちなみにどこかのお笑い芸人のようにかつこよくない。髪は金髪。大柄で、太い眉毛と四角い顔が特徴の優しい男だった。

「いや、『最高のバンドをつくる！』なんて大口たたいたのはいいものの、まだ誰もメンバーが決まっていなかった。」

隼人はドラムを叩くのをやめて、ガクツと肩を落とした。おつちゃんは、隼人が弱音を吐く数少ない人間であった。

「元『THE FREE』のドラマーが一声かければ、集まってくるヤカラなんて腐るほど入るんじゃないか？」

「妥協はしたくないんだ。ただ上手いだけのギタリストも、筋肉ムキムキのベーシストも、イケメンのボーカルもいない。最高のバンドにふさわしい最高のメンバーだけがほしいんだよ。」

隼人は顔を上げてまたドラムを叩き始めた。

「その最高のメンバーってのが、具体的じゃないなあ。」

「まあ、それはそうなんだけどな。」

「いいのか？そんなのんきなこと言ってて。戒の作った『SONIC ADDRESS』はベーシストも見つかってバンバンライブしてるぞ？」

「もう候補は決まってるんだ。」

「だれだ？」

「ベースはアキトに頼む予定だ。元『WILD ULF』（ワイルドウルフ）ギタリストの須藤も入れたい。ボーカルは『PM：SO』の黒田。」

「アキトはともかく、二人はもうこの世界から退いたじゃねえか！」「だからこそ入れたいんだよ。」

そのとき、隼人のポケットから『Blur』の『Song 2』が流れた。メールの着信音にしてはかなり重い曲なので、ドラムの音が響く店内でも隼人とあっちゃんにはよく聞こえた。

「メールだ。」

隼人がピコピコを携帯を操作していると

「彼女か？」

「ちげえよ。」

受信

From りえちゃん

Sub たのもう！（）／

本文：今日は約束の日だね！

（ ） ケラケラ

何時くらいが暇？（ë|ë）？

何時でもいいから、タクトの

家に来てね（↑） フォッ

フォッフォ タクトいっぱい

練習して、上手くなったから

、期待してていようψ（、（ψ

じゃ、絶対来てね！ゞ（ ）

「ぶっ」

隼人が思わず吹き出した

返信

To りえちゃん

Sub 了解。

本文：今からいくよ。期待してるって伝えてくれよ。

隼人はボタンと携帯を閉じた。

「じゃ、用事できたから。」

「あ、やっぱり彼女だなあ？」

「ちげえゝよ、『最高のバンド』メンバーのオーディション。」

そういつて隼人は『D・D・D』からでていった。

1時間後、隼人はタクトの部屋（座敷）であぐらをかいていた。バカな主人公のためすいません。

あたりまえだが、隼人はタクトになんにも期待していなかった。

「じゃ、じゃあいくぞ。」

「どうぞ。」

隼人と理恵の視線が、タクトの8500円のギターに向かった。あまり見られたことがないので、8500円のギターは少し顔を赤らめたように見えた。

ジャンジャジャンジャジャ、ジャンジャジャンジャジャ♪

理恵の顔がゆがんだ。

「ねえ、ちよつと！真面目にやんなさいよ！」

「やってんだろ!？」

タクトは確かに上手くなっていたが、完璧には弾けていなかった。ていうか雑音。

ジャンジャジャンジャ、ジャジャジャンジャ

「最後まで弾けないのか？」

「え!？まあ、そう言われると弾け・・・ない…」

タクトはギターを弾くのをやめた。

「…理恵ちゃん。これが結果だよ。」

隼人はがっかりした顔をして理恵を見た。理恵はあきれ返った顔をしていた。やつちまったな本作主人公タクトよ。残念だよ。次回からこのネヴァーマインドの主人公は隼人にかわる。サブタイトルも　毎日をただぼつ然と生きる馬鹿どもへ　から　モテモテ

天才ドラマーの日常　に変更しよう！

「これだったら弾けるんだけどなあ。」

ジャンジャンジャジャン♪　ジャンジャンジャジャン♪

ジャーンジャーン♪

また2人の視線が8500円のストラトキャスターに注がれた。

ジャンジャジャンジャンジャジャンジャジャンジャッジャンジャ♪

ジャララッランラン、ジャンジャンジャンジャーン

1フレーズ弾き終わると、部屋がシーンとしているのにタクトは気づいた。

「え？なんだよ？黙り込むなよ……」

「すごいじゃん！！！」

理恵の言葉に、隼人も我を取り戻した。

「それ、『JHP』の『Wanderer Song』でしょ！？

なんで弾けんの！？ていうかメツチャ上手いじゃん！」

「そうか？」

タクトがぼか々と口を開いた。このバカ面がウチの主人公ですよ

「耳コピしたのか？」

隼人が口を開いた。

「耳コピ？なんだそりゃ」

またぼか々と口をひらいた。その口を閉じるボケ。

「耳でギターのパートを聞いてコピーすることだ」

タクトも理恵も「へえ」という顔をした。

「驚いたな、こういう『Wanderer Song』もあるのか

…なるほど、ギター3本使っている原曲に1本で近づけるために全部パワーコードの曲をリード分けして・・・」

隼人はぶつぶつ一人ごとをつぶやきながらギターを取り上げた。

ジャンジャンジャンジャジャ、ジャンジャン♪

「ギターが未熟だからこそ考えた方法だな…普通、上級者だったらパワーコードを重ねるほうを思いつく…あるいはレギュラープレイを織り交ぜるが、あえてメジャーコードだけでやるのか…エフエクターが無いから音響効果も使えない状況で…」

「おい」

タクトが隼人のハイレベルな音楽一人ごとを断ち切った。

「え？あ、すまん…」

沈黙

「タクトだっけ？」

隼人がギターを立てかけながら言った。

「正直、期待してなかったよ。悪いけど」

タクトがムツとしたが、理恵が目線でなだめた。

「だが、お前の才能を見極めることが出来てよかったよ。俺が思うに、世界には自分の才能に気付かずに死んでいくミュージシャンがたくさんいると思うんだ。すげえもったいねえことだよ。」

いきなりの話の飛躍に対応できないタクトと理恵。

「『Nirvana』のカート・コバーンは自分の才能を知って恐怖した。そして小さな田舎で生まれた彼は、全世界のファンからのプレッシャーや、状況の変化に耐えられず自殺してしまったんだ。ミュージシャンに必要なものってのは、自分の才能を理解し、自意識過剰にならず、常に上を見続けていくことなんだよな。」

タクトは、「おいおい、何語っちゃってんの!？」って感じで聴いていたが、理恵は真面目な顔で「すごいなあ」という顔で見っていた。「タクト、悪いけど今のお前のギターじゃ俺のバンドには不釣合いだが、お前の未来に期待するよ。」

隼人はニコツとして手を差し伸べた

こいつ…うぜえ…

と、現実主義のタクトは思った。しかし、メロドラマティックなこの展開を、決して不快に思っただけだった。

そして

「この展開、くさいなあ」

と思いながら、

「まったく、めんどくせえなあ」

なんて感じながら

タクトは隼人の手を握った。

「俺の作る最高のバンドの一員として、これからよろしく頼む。」

「ああ、よろしく…な。」

ナンバー03：天才の意義 in the タクトの部屋（後書き）

3話です。

話が淡々になってきましたw

ナンバー04：秋葉原の中心でロックを叫ぶ

ジャンジャンジャンジャジャ」

「確かに始めたばつかにしては上手いな。」

楽器屋『D・D・D』の店内には、店長のあっちゃんが気に入っている人しか入れないプライベートルームがあった。そこに理恵、隼人、あっちゃんの3人は、小さなテーブルを囲んでタクトのギターを聴いていた。

「しつつかし、本当に下手な『Wanderer Song』だな……もうちょっと力強いリフがあってもいいんじゃないか？もともとパワーコードだけの構成なんだし。」

「まあな、だがこれもすっかりした曲だと思うけど、問題は精度だな。タクトはまだ本当に下手だからメジャーのリフの耳コピしか出来ないのは仕方ないが……」

「お前ら、ヘタヘタうるせえぞ……！」

タクトがギターを置いた。

「それより、ここ最近ずーっと何時間もギター弾かされて指が痛くて上手く弾けないんだよ……！」

タクトは隼人の『最高のバンド』にはいるため、毎日何時間もみっちり隼人鬼教官の下、ギターの練習をさせられていた。もう指は皮がむけ痛々しいほどだった。

「ところで、他のメンバーはどうなんだよ？」

あっちゃんはタクトの言葉を流した。

「ベースのアキトの条件は『戒より実力のあるギタリスト』を連れてくること。つまりそのギタリストを入れればアキトも入るんだ。」

「じゃあ、そのギタリストはもう検討ついているの？」

理恵もしっかり話に加わっていた。一応マネージャーだもんね。

「俺も一応ギタリストだろ？俺じゃダメなの？」

「検討はついてる。あっちゃんには話したんだが、元『WILD U.F.』の須藤ってギタリストを向かえ入れようと思ってる。」

タクトの話はまた流されたが、話の展開的にこっちの方が手取り早いので、あえてつつこみは入れない。

「どういう人なの？」

「もちろん『戒より実力のあるギタリスト』ってのは保障するよ。けど、須藤はもうギターをひいてないらしい。」

『THE FREE』の解散の話はタクトも理恵も聞いていたので、戒のことは知っていた。

「まあ、他にも問題はあるけどな。」

あっちゃんがため息をついた。

「なんなんですか？」

理恵はいい感じに質問するんでこっちとしてはナイスキャラです。ていうかタクトも会話に参加しろ。

「説明するより会いに行ったほうがはやいな。よし、準備しろ。」
会話終了。タクト出番なし。

日本一の電気街といわれる街。秋葉原。

一時期ドラマや映画などで一気にメジャーな観光スポットとして君臨したこの街には、海外の有名ロックアーティストも数多く足を運んでいる。

自分の好きなことにだけ興味をしめし熱中する者、いわゆる『オタク』と呼ばれる人間が集まるのもこの街の特徴だ。マニアックな店が多く立ち並び、好きなアニメ、漫画キャラクターと同じ格好をした若者、我々の生きる世界からドロップアウトした人間が練り歩くこの街に、タクトは明らかに威圧されていた。

「なんで秋葉原なんだ！？電。男でも探すのか！？」

古い。タクトはなぜか無性に恥ずかしい気分で隼人についていつていた。しかし理恵といえば

「ああ！あれメイド喫茶でしょ！！すごい！変なカッコしてる人いっぱあい！！」

とはしゃいでいた。なんと頼もしいヒロインだ。

「おい！隼人！俺ら明らかに浮いてるぞ！」

タクトはなぜか女子高生の格好をした男とぶつかりそうになった。

「こええ…この街こええよ！！明らかにアウェイじゃんかよ！！」

「ちよつと待てつて。」

隼人は地図のような紙をもって、ア。ロ。レイの格好をした男と、脂っこい長髪のおじさん、お姫様のようなピンクの服をきた女の間をスタスタを歩いていった。

「いた。」

隼人が立ち止まった。視線の先には、なにかのコスプレをした女の子が、有名アイドルの歌を歌っていた。そのまわりには10人程度のファンのようなおっさんやらが彼女の歌に合わせて踊っていた。アマ・アイドルの路上ライブのようなものであるうか。

「なんだよ、あの女の子が須藤だとか言うんじゃねえよな？」

タクトはラムちゃんと肩がぶつかった。

「ちげえよ、あれ見てみる。」

隼人が指をさしたのは、アマ・アイドルの歌に合わせて踊っている『オタク』くんの一人だった。身長は高く180程度であろうか。

ジーンズにシャツを入れ、リュックを背負っている。やけにでかい眼鏡の男は、満面の笑みでアマ・アイドルを応援していた。

「あれが元『WILD ULF』のギタリスト、須藤 良太だ。」

「ええ！？」

理恵とタクトが同時に声を上げた。そりゃあねえ…

「こんな寒いのにシャツ一枚で騒いでる奴が！？」

突っ込むべき所はそこではない。

「なんていうか、もつと…なんていうか」

『オタク』じゃないと思っただけなんだけど理恵には言えなかった。

「もともと須藤は…なんていうか、その…まあ、『オタク』だったんだ。『WILD ULF』はビジュアル面でも高い評価を得ていたから、イメージ的にメンバーに『オタク』がいるってことがまずかった。そこで他のメンバーから『WILD ULF』をクビにされたんだけど、最高のギタリストである須藤がいなくなったことでバンドのクオリティは下がっていき、結果的に解散。」

「なんちゅう話だ。」

タクト、たまにはちゃんとした意見も言うのだな。

「まあ、それで、須藤もかなり傷ついたらしい。もうバンドなんかやらない！みたいなことも言ってたし。」

「じゃあ無理だ！帰ろう！」

タクトが回れ右をするのをぐいっと思恵が引つ張った。

須藤が見ていたアイドルのライブが終わり、周りのファンがそのアイドルに集まりサインや握手を求めていた。その順番待ちにならぶ姿に、東京で名を馳せたロックバンド、元『WILD ULF』ギタリストの面影はどこにもない。

「今がチャンスじゃないのか？」

「まあまあ、いきなりはまずいだろう。」

そう言っているうちに、須藤は『オタク』仲間のような3人組と一緒にその場から離れ始めた。

「とりあえず追うぞ。」

タクトと隼人と理恵は、その『オタク』軍団の後をつけた。赤毛でピアスをしまくっている不良のような隼人が『オタク』軍団を追いかける様子は、はたから見れば明らかに『オタク狩り』の真っ最中である。

「おいおい、勘弁してくれよ…」

タクトがそう言ったのは、その『オタク』達が、秋葉原定番の喫茶店、いわゆる『メイド喫茶』に入った時だった。

「あたしもちよつと入るの勇氣いるかも。」

さすがの理恵も一瞬戸惑う。

「そうか？一回入ってみたかったんだ。」

隼人が2人の意見も聞かずスタスタ店内に入ってしまった。理恵もついていこうとした。

「おい！マジに入るのか？」

「仕方ないじゃん。隼人くんが行っちゃったんだから。」

理恵は嫌そうに言ってるようにしてたが、内心ウキウキだったのをタクトは気づいた。

「お帰りなさいませご主人様。」

「え？いやあ、どーもどーも。」

隼人は照れながら店内に入った。

「お帰りなさいませお嬢様。」

「へへ、ただいま。」

理恵も照れていたが、へんな悪ノリを見せた。

「お帰りなさ。」

「ストップ！大丈夫、それ以上言わなくていいから！」

タクトはすたすたと理恵に続いた。

中は『オタク』といわれる男達がほとんどの席を占領していた。店内は普通のファミレスのようなつくりだったが、席の一つ一つに液晶テレビが設置され、アニメ等が映っていた。店内の中心には円形ステージのようなものがあり、そのステージを囲むようにカウンターのような席が用意されていた。店員：じゃなくてメイドさんたちは、それぞれの席で『オタク』を相手にゲームをしたり話相手になったりしている。

須藤たちの『オタク』軍団は、ステージを囲むカウンターに四人で座り、雑談を交わしていた。

「どうするんだ？」

「まってる、俺が話かける」

隼人が率先してその四人に歩いていった。

その場に明らかに不釣り合いなロツカー隼人が、『オタク』やメイドたちの視線をおもいつきり浴びながら須藤の後ろから近づいた。まだ四人は気付いていなかったが、その四人の話し相手のメイドさんが先に気づき、何か言おうとしたので「しっ」と人差し指を自分の唇に当てた。

トントン、と須藤の肩を叩いた。

「須藤だよな？」

須藤が振り向き、周りの三人も隼人を見た。今現在、店内すべての人の視線を集める隼人。

「…『THE FREE』の中川 隼人…」

須藤が恐怖に満ちた顔をしたので、隼人は無理に自分の顔をニコツとさせたが、逆に不気味になってしまった。

「あのさ、今からすこし、話せる？」

隼人が不気味な笑顔で話しかけたので、須藤はビクツとした。しかしそのとき、

「『THE FREE』の隼人さんですよね！」

奥の席の『オタク』を相手していたメイドさんが隼人に話しかけた。「え？ああ、そうだよ。」

その瞬間、ガタンツと椅子を倒して須藤が逃げ出した。

「あ、やべ！」

須藤は理恵とタクトを突き飛ばして、2人の間を通り抜けた。

「いたっ！」

「大丈夫か！？」

理恵が倒れたので、タクトがたたせていると、

「タクト！追え！」

と隼人の声。しかたなくタクトが理恵を立たせ終え、外に走っていった。それに隼人も続く。

「理恵ちゃんは今にいて！」

外は相変わらず『オタク』達がたくさんいたので、コテコテ『オタク』ファッションの須藤を見失ったかと思ったが…
「いてえ…」

メイド喫茶を出た所でぶっ倒れていた。

「…」

一瞬あきれるタクト

「ほら、立て！」

「なんなんですかあゝ一体…！？」

無理矢理須藤を立たせ、また喫茶店の中に押し込んだ。

店内の一番端の席を用意してもらい、須藤を囲んだ。はたから見ればカツアゲである。

「とりあえず今いくらかもってんの？」

「隼人くん、ちがうでしょ。」

「ああ、そうだった。ええっと、もう俺のことは知ってるんでしょ？」

隼人は須藤の肩に腕を組んだ。

「ええ、一応、『THE FREE』は原宿じゃ名の通ったバンドでしたから…」

あからさまに須藤は怖がっていた。まあ、当たり前だが…

店内は、またタクト達がいった時と同じ光景に戻っていた。がやがやと『オタク』達が自分の好きなものを熱く語っている。

「じゃあ『THE FREE』が二分したってことは知ってたか？」

「い、いえ…最近アキバばかりにいたので…」

「あつそう、まあいいや、簡単に言つと、俺今バンド作ってるんだ。『最高のバンド』だ。それに入れ。」

命令。なんとも理不尽きわまりないが、これが隼人のやり方のようなだったので理恵もタクトも突っ込まなかった。

「い、いやですよお！知ってると思いますけど、僕は前のバンドで

…」

「てめえ、あんまふざけた事いつてつと、てめえの顔面、俺のドラムのタム（中心のドラム太鼓）の代わりにするぞ？ん？それともピツク（ギターやベースを弾くプラスチックの小さな板）の代わりにされたいか？それがイヤなら裸にして、体中の穴という穴全部にシールド（ギターやベースとアンプをつなぐコード）ぶっさして、アンプに繋いで秋葉原で人間楽器でもやるか？」

隼人の顔は笑顔だったが、それがまた怖い…

須藤は隼人から脅されていたが、須藤はそれより前の席の『オタク』の相手をしているメイドをチラチラ見ていた。さつき隼人に話しかけたメイドだ。

「おい、俺の話し聞かずにメイドちゃんみてるたあ、いい度胸だなあゝおい。」

「ひいゝ！」

隼人が組んだ肩に力を入れたので須藤は無意識に声が出た。

「あ、さてはあのメイドさんがすきなんでしょ？」

理恵が身を乗り出していった。

「そうなのか？名前なんていうんだ？」

隼人がまた力を入れた。

「ひっ！……………れもんちゃんです…」

「れ、れもん…」

タクトがうさんくせえ…という顔をした。

「れもんちゃん！！！」

隼人がピーンと手を挙げてれもんちゃんを呼んだ。れもんちゃんは振り向いて「はいっ！ご主人様！」とコチラの席に近づいた。

「ちよつちよつとお…」

須藤が「やめてくださいっ」と目で訴えたが、隼人は須藤と逆方向に座るスペースを作り、そこにれもんちゃんを座らせた。

「『THE FREE』知ってるんでしょ？メンバーの中で誰が好きだった？」

隼人は須藤から腕をはずし、逆の腕で今度はれもんちゃんの肩を優しく引き寄せた。

「え？…もちろん…は…隼人さんです…」

隼人とれもんちゃんがイチャイチャしているのよりも、須藤があらさまに泣きそうになっていたのが面白くて、タクトと理恵は黙って見ていた。

「ライブにきてくれたことある？あ、でもこんな可愛い子がくれば気付くはずだし、僕達のライブには来た事ないかな？」

「れもん、何回も行きましたっ。いつも隼人さんを見てました。」
メイドさんとして「隼人さん」というのは経営方針に反してはいないか？とタクトは頭の中で突っ込んだ。

「じつはさ、こいつも俺のバンドのメンバーで、タクト。」

隼人がタクトを指差した。

「そうなんですか？パートはなんなんですか？」

「おれはギターだよ。」

タクトがニコニコしながら言ったので、須藤がタクトをにらみつけた。

「やっぱバンドやってる人ってカッコいいと思わない？」

隼人がまたれもんちゃんをぎゅっと引き寄せた

「はい…隼人さんもタクトさんも、とってもカッコいいです…」

れもんちゃんはずっと目つきで隼人を見た。タクトも笑顔になると、須藤がまたタクトをにらんだ。

「なんか喉かわいちゃった。なんか持ってきてくれる？」

「はいっ」

タタツとれもんちゃんは去っていった。隼人は他の所でもやってるな…

「須藤ちゅわあ〜ん」

隼人はまた不気味な笑顔を見せた。

「れもんちゃん、バンドやってる奴好きなんだってえ〜俺かっこいいって言われちゃったよ」

須藤があからさまに羨ましそうな顔をしたが、それを隠した。

「だめなんです！もう決めたんです！！！」

もう一押しだ！とタクトと理恵が思った。頑張れ！モテ男の実力見せてみる！！

「あつそ。わかった。」

あれ？

隼人はサツと立ち上がり、タクトと理恵に「行くぞ。」と言って出ていってしまった

理恵とタクトはもちろん、須藤もポカーンとした顔をした。

再び楽器店『D・D・D』。

「なんで帰ってきたんだよ！？あいつあと少しで落ちたぞ！？」

「どうかね。それより、須藤の実力が落ちてる可能性を考えてなかった。」

隼人はカタカタとパソコンで調べものをしていた。後姿もなんとかこいい。。

「どういう意味だよ」

「タクト、理恵ちゃん、これ見てみ。」

呼ばれてない店主あつちゃんもパソコンを覗き込んだ。

||||||||||||||||

メイドカフェ『Pink Moe』

ついにあした！あたしたちがご主人様のために

バンドしちやいますっ！

ぜひ遊びに来てにゃん！

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

「萌え」

タクトがふざけたので理恵が叩いた。

「このイベントで須藤を狩る。」

隼人が何を考えてるのはわからなかったが、

タクトはもうどうでもいいや…

と主人公らしからぬ言葉をおもった。

ナンバー04：秋葉原の中心でロックを叫ぶ（後書き）

須藤勧誘編。

この小説を読んでくれる人はいるのでしょうか・
いたらぜひコメントとかくださいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5237f/>

ネヴァー・マインド～毎日をただぼう然と生きる馬鹿どもへ～

2010年10月9日11時19分発行